論 文

按司の名称をめぐる語源に関する比較言語学的考察

橋 尾 直 和

1. はじめに

筆者は、「琉球語と古代朝鮮語[1]の比較言語学的考察」『高知県立大学紀要（文化学部編）』第61巻（2012）において、『おもろさうし』に見られる「てだがあな」の「あな」は〈穴〉にあらず、〈主〉であることを古代朝鮮語との比較考察によって推定した。新羅の始祖、朴赫居世の別名である閼智（アルチ）は、anatiに由来する。このanaこそが「てだがあな」の「あな」であり、〈主〉あるいは〈王〉を意味する。大穴牟遅神（オオナムヂ）・大己貴命（オホナムチ）・大汝命（オホナムチ）の前形である「オオアナムチ」の「アナ」はまさにこのanaに相当する。「アルチ」の「チ」も「オオアナムチ」の「チ」も同源と見なすことができる。そこで、「按司」の語源を、*anatiに求めた。さらに、日本語の「あるじ」（主）も*anatiと異形態である*aratiが出発形と考えた。「あんじ」「あぢ」と「あるじ」は、次のようなプロセスを経たものと推定した。

あんじ あぢ

*anati＞*anti＞*andi＞*andʒi＞a^{n}dʒi＞adʒi

あるじ（主）

*arati＞*aruti＞*aru^{n}di＞aru^{n}dʒi＞arudʒi

李炳銑氏の『日本古代地名の研究－日韓古地名の源流と比較－』(2000 : 147)によれば、このanaは、〈主〉あるいは〈王〉を意味する나라님 nara-nim（nimは敬称接尾辞）のnaraに由来すると見なしている。筆者は、この説に従って、次のような語形変化を推定した。

*nara＞*ɲara＞*jara＞*ara＞ana

赫居世が自ら称して閼智居世干として以降、〈王者に対する尊称〉になったとされているが、*ara-ti（閼智）という語は、元来、〈主者〉〈王者〉に対する称号であった。これは、日本語のaru-dʒi kwanpaku（主関白）、kuɲi-tatsu aru-dʒi（国主）の aru-dʒiと比較される。上記の-tiと-dʒiは、人称接尾辞と考えられる。

*ara＞anaの語形変化を推定するならば、ara-tiの異形態であるana-tiが存在した可能性が高い。したがって、「あんじ」「あぢ」と「あるじ」は同源と見なすことができる。

また、この「按司」は、「ヒャー」「チャラ」[2]「ティダ」（太陽）「ユヌヌシ」（世の主）とも呼ばれた。まず、「ティダ」については「太陽神」に見立てて崇めたとことで解釈できる。一方で、「ヒャー」の語源を「大親」に求める説、「チャラ」を「タラ」（太郎）に求める説があるが、これらの解釈は納得できるものではない。さらに、〈倭寇の頭目〉を「ガーラ」というが、これを日本語の「かしら」〈頭〉の意に求める説もある。筆者は、これら複数出自説を認めない立場である。本論の目的は、これら従来の複数出自説を検討し、新たに単一出自説を提唱することである。

2. 従来の語源説

2.1 「ヒャー」の記述

まず、按司の別称である「ヒャー」について、検討してみたい。

『改訂名瀬市史誌 1 巻 歴史編』(1996)「第 2 章原始から古代」の「2 奄美世（アマンユ）ーマキョ共同体時代」において、執筆者の大山麟太郎氏は、按司の別称「ヒャー」の語源に関して、以下のように述べている。

奄美古代の集落はマキョといった。民俗学でいう本土のマキと同じく、同族団的な血縁社会である。マキョの中心の家は、共同体の祖家と見なされるウフヤーあるいは　フーヤ（大屋または大親）である。集落草わけの先祖「根立テ親加奈志」以来の本家すじと考えられている家である。

この家の男子（エヘリ）は村の行政をつかさどり、やがてヒャーに成長していく。ヒャーはおそらくウフヤかからきたことばで、ふつう「百」の字をあて、共同体の族長的な首長のことである。喜界島の「百之台」は、この首長の「百」たちが集まってて雨乞いや協議をした高台という意味からきた地名であろう(注)。一方、ウフヤーの家の娘、つまりオナリ（姉妹）の一人は、集落の祭りをつかさどって自分のエヘリ（兄弟）の行政権をバックアップする。これが南島特有のノロ（祝女）制度の母体となる。

（注）百之台は、現在喜界島の中央部に広がる隆起さんご礁の広い台地全体をさした地名になっているが、正しくは、そのうちの 1 番高い台地で石で囲われた場所（大字大朝戸小字百之台）の名が周辺の台地全部に及んだものである。古代首長たちの会議所の跡との伝承があり、享保 10 年に土地の豪族で与人の永語がここに水天宮をたてた。

（『改訂名瀬市史誌 1 巻 歴史編』1996：122)

また、『同上』「第 3 章中世」の「3 按司（あじ）の発生と出自」において、同氏は、以下のように述べている。

ヒャーは、おそらくフウヤー（大親）の転ではあるまいか。第二尚氏の時、大島に任命されてきた長官は、首里之大屋子という。大屋子は大役のこと（沖縄の歴史）であろうが、島民はかれらを大親とよんでいた。以前の血縁的な族長的首長の名称で、かれらをよんだわけである。

王朝支配にならない前のヒャーが生長転化したものが、アジであろう。このアジをつけて個人名でよばれる歴史上の人物名は、ちょっと見当たらない。南島雑話に採録された子守歌に出てくる、力持ちの「平按司」は、ヒャアーアンジとも読める。ヒャーとアジが、くっついたものかも知れない。按司は、アジともアンジともいう。

（『同上』1996：222)

上記の解説より、「ヒャー」の語源に関して、以下のように、「ウフヤー」（大親）から変化したものと「フウヤー」から変化したものとで解釈しているが、おそらく、大山氏の解釈は、以下を想定してのこ

とと思われる。

ʔuɸuja:ウフヤー>ɸu:ja:フウヤー>ça:ヒャー

この語源説については、音声変化として、ʔu の脱落の可能性は考えられるが、「フー」ɸu:のような u 母音の長母音から「ヒャー」ça:（hjaa）への変化には無理がある。「フウヤー」から「ヒャー」の間に「フヤー」ɸuja:を想定しても、この解釈には説得力がない。

さらに、「ヒャー」ではなく「ヒャアー」という、以下のような表記も見られる。

> こうして、奥間大親（ヒャアー）の子で、勝連アジの娘を妻にしていた察度は、鉄の力でヒャアーからアジとなりついでその人物と能力のため、「世之主（王）」となったのである。彼が天女の子であったとの伝承をもつのは、母が祭をつかさどる神女の関係者であったことをさすのであろう。政治権力のバックには、宗教的な権威が必要であった時代の歴史現象を語るものである。
>
> （『同上』1996：236）

筆者は、上記の「ヒャアー」が、仮に大山氏の表記が不統一であったせいであるにせよ、「ヒャアー」から「ヒャー」への変化はあり得ると考える。この点については、後述することにしたい。

2.2 「チャラ」の記述

次に、按司の別称である「チャラ」について、検討してみたい。

これについては、『沖縄古語大辞典』(1995)の記述が詳しいので、関連語彙を掲載することにする（見出し語の横に出典の頁数を掲げる）。

> ちゃら 才 古 (417)
>
> 按司のこと。勝れた者の意で、「あち」（按司）の同義として使われる。勝れた人の名につける「たら」（太郎）からの転訛であろう。「だいくに」（大国）→「だくに」→「ぢゃくに」と同じ口蓋化によるもの、「つくしちゃら」の例は勝れた物の意の美称辞的用法。→あぢ《あかのこか　ふね　たては　くにのちゃら　とこいちへ　おみかう　おかま》〔才 8巻464〕語形 だら・ちやら

上記のように、「チャラ」は「ちゃら」の見出しで、「按司のこと。勝れた者の意」とある。次のように、多い意の「モモ（百）」を付加した「ムムヂャナ」という名称も、「ももぢゃら」の見出しで確認できる。

> もも-ぢゃら【百ぢゃら】才 琉 ムムジャナ (673)
>
> 多くの按司。『混集』（坤・人偏）に「もゝぢやら　諸の按司と云事」とある。オモロ原注に「国々の按司の事女按司は今をなちやらと申是なり」（8巻438）」とある。「ちやら」は按司のことで、貴人の名に付ける「たら」（太郎）の転訛。「ももあぢ」に同じ。《あたにやの　いちみ　さうす　もゝちやらの　うらやも　さうす》〔才 2巻70〕琉歌例は今帰仁村運天にある尚徳王の遺臣一族の墓 百按司墓のこおとといわれる。『国頭郡志』には「白骨累々として堆積也り」とある。「百ぢゃな」は「ももぢや

ら」の転訛《たづねれば　昔　よしや　白骨の　さらす　百ぢやなや　百の　哀れ》〔琉 全2310〕語形 オ もゝちやら・もゝぢやら 琉 もゝちやな 百ぢやな

「ジャナ」（謝名）も、「チャラ」（按司）の変化形の可能性があると解釈している。

じゃな【謝名】オ 古 琉 ジャナ (336)
②人名。「ちゃら」（按司）の可能性もある。《しちュわい　うらそへや／うらししちュや／じゃなが　そでたる／すものたま　あそばちへ／すこしだま　あそばちへ》《古 ウ 91-6》語形 オ 古 じゃな・ちやな・ぢやな 琉 きやな 謝名

按司の同義語としての「ティダ」「ユヌヌシ」の記述が、「てだ」「よのぬし（世の主）」の見出しで確認できる。

てだ オ 古 琉 組 ティダ (440)
②按司。王。原義は太陽であるが、後に時の支配者、権力者である按司や王などを敬称することばとして使われるようになる。《首里の　てたと　天に　てる　てたと　まぢゆに　ちよわれ》〔オ 5巻 212〕

よのぬし【世の主】オ 古 組 ユヌヌシ (717)
地方の領主および国王のこと。《嶋尻の　世の主　八重瀬の按司》〔組 忠士 70 下〕

すなわち、按司の別称としては、「ヒャー」の他に「チャラ」「ヂャ（ジャ）ナ」「ティダ」「ユヌヌシ」が認められることになる。

「ヂャ（ジャ）ナ」については、語末の「ラ」ra が「ナ」na へと r>n の変化として考えられるので、「チャラ」からの変化形として、容易に解釈できる。したがって、「ヒャー」「チャラ」「ティダ」「ユヌヌシ」が按司の別称ということになる。

「ティダ」「ユヌヌシ」に関しては、辞典の記述のとおり、原義は太陽であるが、後に時の支配者、権力者である按司や王などを敬称することばとして使われるようになり、地方の領主および国王のことをそう呼んだ、と解釈して差し支えないであろう。

問題は、「チャラ」の語源として、〈勝れた人の名〉〈貴人の名〉に付ける「タラ」（太郎）がその由来とすることである。果たしてそうであろうか。同じ按司を表す表現として、別の出自を考えているが、按司を表す同じ語からの派生形ということも考慮する必要があるのではないだろうか。

2.3　倭寇の頭目に関連する語の記述

稲村賢敷氏は、「第 4 節 童名がーらは倭寇の子孫である」『琉球諸島における倭寇史跡の研究』(1957) の中で、宮古語の「がーら」という倭寇の子孫を表す名称には、〈頭〉という意味があり、当時日本から渡

来した人々がその仲間の頭梁に対して「かしら」と称していたので、島民はこれを島語の訛りによって「がーら」または「がーら」と称した。しかし、その意味は日本語の「かしら」と同じように仲間の頭首という敬称の意味があった。これが次第に日本人全部に対する名称となり、そして子孫もこれを誇りとして継承するようになったものと説いている。

また、稲村氏は、「琉球列島では「がーら」といふ名称は宮古島には特に多いであるが宮古だけに限らず八重山諸島でも又沖縄の離島等にもいくらか発音は違ふけれども使用されたようである」と述べている。例として、次の2点を挙げている（稲村 1957：279-280）。

例（一）伊波普猷著沖縄考には「八重山旧記中の人名には平川（びらかー）かわら、西（いり）かわら、東（あがり）かわら、幸本（こーむと）かわら等があり、宮古にも根間角（にーまつぬ）かわら、加和良保爺（かわらふや）、崎原（さきばる）かわら等が男子の名に表はれている。このかわらは恐らく頭の義であろう」

例（二）同書にもある沖永良部島の古謡

後蘭孫八が積み上げたる城（ぐすく）

永良部三十祝女（えらぶみそのろ）の遊びたる所

後蘭孫八は漢字を宛ててあるために発音は明らかではないが、「ゴーレー」又は「がーら」に近い音である。孫八は明らかに日本人名称であるから、後蘭孫八なる人は日本人であろう。

この記述から、「がーら」という名称が宮古だけでなく琉球諸島に広く使用された名称であることを確認できるが稲村氏は、果たして伊波氏の考えるように頭の意を表すかどうか、宮古方言で検証している。以下の8語について、解説している（稲村 1957：280-281）。

(1) かなまり　頭のこと。「かな」は「から」から転訛したものと解釈。

(2) かたがら　片頭（かたがら）の意味。「かたがらやむ」は半頭痛のこと。「がら」は頭部と解釈。

(3) んぎがら　頭から抜けた毛、脱毛のこと。「がら」に頭部の意味があると解釈。

(4) いりがら　毛髪を束ねたもの。「いり」は入れ添える、「がら」は頭部と解釈。

(5) からず　髪毛のこと。「からすず」の詰まった音。「から」は頭部と解釈。

(6) がーり者　おしゃれをする者のこと。「がーり」は頭に関係のある言葉と解釈。

(7) まがーら玉　頭部の装飾に使用する玉のこと。「がーら」「かあら」は頭部に関係のある言葉と解釈。

(8) かむら　長女に対する愛称として老人達が現在も使用している。初娘またはかしらの娘という意味と解釈。

以上の諸例により、「から」「がら」「かな」「がーら」「かあら」「がーり」「かむら」等の言葉がいずれも〈頭部〉の意味に使用され、または頭部に関して使用されている。これから考えると「がーら」という名称には〈頭〉という意味があると思われる、としている。

稲村氏は、横井時冬博士の『日本商業史』を引き「当時支那では倭寇の隊長について日本甲螺と称して畏怖した。それで日本人ばかりではなく、支那人の間でも日本甲螺と称して威を震つた者があった。王直、除海、陳東等と同じく当時南支沿岸に暴威を逞しうした顔振泉は台湾に拠り自ら称して日本甲螺といつたといふ。甲螺は猶頭目というが如し、加志良音甲螺に近し故に訛称したるのみ、振泉死するに及びて衆鄭芝竜を推して甲螺とす」（同書 99）と述べている。

また、「南方諸島で日本人の事を古くゴーレー人と称するのも日本人仲間でその頭目に対して頭（かしら）（加志良と発音す）と称する事から起り、次第に日本人全部の名称となつたものであろう」と述べている（稲村 1957：279）。

さらに、稲村氏は、『宮古島旧記』に「角がーら」とい名称が確認され、その解釈と見られる記述を挙げている（稲村 1957：281）。

> 其子頭に角二つあり、手足は鳥足に似て人間の姿にあらず、其名を目利真がーらと申候（第 17 章参照）

この説明から、頭に角が二つあったので「角がーら」と言ったということになり、「がーら」は頭部の意味に使用されたと解釈している。日本語の「かしら」は頭部の意味から転じて一対の者の頭首、または一般に上の人という意味に使用されている。そして、この「かしら」に相当する言葉として、宮古では「がーら」と言ったものと解釈している。証左として、宮古方言の発音で「し」の音はそれが単独でない場合には長音化するか省略されることが多いとし、次の 3 点を挙げている（稲村 1957：282）。

例 (1) 柱「はしら」は宮古語では「ぱら」と言っている。

(2) 屋敷「やしき」は「やすき」または「やーき」という。

(3) 筵「むしろ」は「むっそ」と発音する。これもしが詰音化したものである。

しかし、上記の証左から、頭「かしら」から「かーら」もしくは「がーら」に変化した例として適応できるのは、(2)の屋敷「やしき」の場合のみである。頭「かしら」から「かーら」「がーら」と変化するのであれば、柱「はしら」も「ぱーら」とならなければならないはずであるが、そうはなっていない。

大山麟太郎氏は、奄美地方に伝わる説話や地名などに見られる、ゴリヤ、グリヤ、ガリヤ、グラル、ゴランには、島外と関係のある「いくさ大将」のにおいがするとして、『改訂名瀬市史誌 1 巻 歴史編』(1996) の中で、詳細に論じている。

> ヤマトのいくさ大将に縁のある所には、共通な特徴がある。水田地帯であるか、良港であるか、大体この双方をかねている。周辺に「ゴリヤ」系統の地名か人名が残っている場合が多いことも、もう一つの特徴である。
>
> 平家伝説に関係のある、大島の戸口・浦上・諸鈍・喜界島の川嶺、沖永良部島のグラル（後蘭の字をあてる。）などが、それである。大島の名柄の場合は、攻められるのは名柄ハチマン（倭寇か？）といういくさ大将で、攻めたのは琉球王軍、徳之島の伊仙面縄の場合は、守ったのはゴランのアジで、攻めたのは唐の軍である。
>
> 大美川流域の水田地帯の戸口に残る地名は、戸口ゴリャである。これはゴリャ城（ぐすく）ともいい、旧藩の地図にも、ゴリャ城と書いてある。戸口ゴリャという水田中の岡と矢合わせをしたという仲勝ゴリャという小山も、仲勝よりの水田の中にある。
>
> 諸鈍では、山手の里を守ったのが、ナングモリバルというノロ（ノロの次位の勢頭ともいう。）のナングモリを中心とした血族集団、攻めたのが琉球王軍を援軍にたのんだグリヤバルである。攻めあぐんだグリヤバルの一党が、ナングモリの主宰するオホリ（御送祭）の祭儀中、その祭司長になっている神女ナングモリの不意をうって殺したと伝えられている。このグリヤは、諸鈍の浜手のカネク（金

久）によった一党である。民話はグリヤの出自を伝えていないが、金久を地盤にした新興集団で航海に関係のある（琉球王との関係もそこから生じた。）一党で、しかもこの島の宗教儀礼をおそれない者である。そして名称のグリヤとならべると、島外、おそらく本土に関係のある集団との解釈に傾かざるをえない。

平家伝説を附近にもつ喜界の水田地帯川嶺の小字名にはグリヤとかゴリヤのつく地名が三つある。

沖永良部の後蘭（グラル）のグスクをつくったという、後蘭（グラル）孫八はあまりに有名で、琉球北山王の子の沖永良部世之主の四天王の一人である。「世之主かなし由緒書」によれば、「9尺あまりの大男にて、・・・・・・・・・多分は日本よりの落人。」とある。かれの本拠グラルは、この島一の水田地帯である。

グラル孫八が積み上げたるグスク

永良部三十祝女（みそノロ）の遊び所　　（民謡）

名瀬市古見の大川水系水田には、地名でゴリヤ川（名瀬勝小字名）、人名で古見我利爺という酋長が登場する。この人物は、説話では悪人にされている。笠利の湯湾大親を琉球王にざん言して討たせた後、悪業がばれて、自分も琉球王にうたれたことになっている。この人の出自はわからない。湯湾大親は大島の地の人ともいわれるので、彼は島外の人だったかも知れない。

これらの説話、地名にでてくる、ゴリヤ・グリヤ・ガリヤ・グラル・ゴランの背後からは、島外と関係のある「いくさ大将」という共通のにおいがする。その島外は、本土くさい。

（『改訂名瀬市史誌1巻 歴史編』1996：224-225）

琉球に関する代表的なポルトガル資料として、トメ・ピレスが著した『当方諸国記』がある。第4部「シナからボルネオにいたる諸国」には、次の記述が見られる(3)。

レケオス（lequeos）はゴーレス（guores）と呼ばれる。彼らはこの名前のどちらかで知られているが、レキオス（lequios）というのが主な名前である。国王とすべての人民は異教徒である。国王は中国の臣下で、朝貢を行っている。・・・・・・彼らは中国に渡航して、マラッカから中国へ来た商品を持ち帰る。彼らはジャンポン（Janpon）に赴く。それは海路7、8日の行程のところにある島である。彼らはそこでこの島にある黄金と銅を商品と交換に買い入れる・・・・・・。

また、琉球人について「正直な人間で、奴隷を買わないし、たとえ全世界とひきかえてでも自分たちの同胞を売るようなことはしない。かれらはこれについては死を賭ける」と記述している(4)。

そして、この「ゴーレス」についての解説が、『改訂名瀬市史誌1巻 歴史編』にも見られる。大山氏は、稲村氏と同様、「ゴーレス」「がーら」「ゴリヤ系名称」を、「かしら」（頭）を出発形とした同源の語と解釈していることが分かる。

このゴーレスには、定説がない。新村出博士の高麗人説に組する後継者は出ないようであるが、藤田豊八博士の「ゴーレスは、倭寇を内容とする西部日本人なり。」秋山謙蔵・小葉田淳両教授の「ゴーレスは、琉球人なり。」は、いずれも有力である。沖縄では、安田延氏が琉球人説、稲村賢敷氏が「日本人全部の名称」と、こっちも両説がある。

稲村氏は、宮古諸島に多い童名「がーら」は、倭寇の子孫であることを表示する名前であると主張し、ガーラの語源は、日本語の頭（かしら）であることを立証するため、横井時冬博士の日本商業史を引用しておられる。いわく、「当時支那では、倭寇の隊長について、日本甲螺（コーラ）と称して、畏敬した。・・・・・・・・・甲螺は、なお頭目　　というが如し。加志良、音甲螺に近し、故に、なまり称したるのみ云々。」

そして稲村氏は、さきのゴーレスも、「日本人仲間で、その頭目に対して頭（かしら）と称することから起り、次第に、日本人全部の名称となったものであろう。」としておられる。

少なくとも奄美諸島のゴリヤ系名称は、稲村氏の説で解釈する方が妥当であろう。同氏も、グラル孫八のグラルを一例にあげておられる。

伊波普猷氏は「沖縄考」で、八重山や宮古の「かわら」（首長）は、恐らく頭の議であろうとされている[3]。さきにあげた宮古の竹富島のウタキには、徳之島から御渡りの塩川トノがひらいた波レ若ウタキの外に、「久米島ヨリ御渡幸本フシカワラ拝ミ初ル」幸本ウタキ等がある。

室町時代のうつぼつたる気運のなかで、南方雄飛を考えた勇者たちや、戦乱の本土で志を失った亡命者たちが、この列島に上陸し、格段にちがった彼らの文化（ことに鉄文化）と武力で、この島の水田地帯や良港のどこそこを押える小領主となった時、渡来者たち（その中には中国人部下もいたろう。）が、統領に対し、「かしら（日本人部下）」とか、コーラ（中国人部下）とよんでいたことが、島民の間にゴリヤ系名称を残したものと考えても、さして無理はなさそうである。

（『同上』1996：225-226）

果たして、すべて「かしら」（頭）を出発形と見なして良いのであろうか。そこには、「がーら」の出自が「かしら」（頭）であるとする解釈が先行し、「かしら」は日本語であるから、「がーら」「ゴーレス」も日本人である、という論の飛躍があったのではないだろうか。以上の点について疑問を抱いている筆者は、従来の説に対する反論を展開することにする。

3. 筆者の語源説

筆者は、両語からさかのぼる祖形として*kara を再構する。さらにこの語は古代朝鮮語 kan「干」にさかのぼるものと解釈する。kan「干」は、「村主」の「主」に対応し、〈首長〉に通じ〈頭目〉をも表す。

『和名抄』などに見られる村干〈村長〉を意味する sukuri（須久利・村主）は、su（村）＋kuri（干）に分析される（李 2000：179）。

伊勢国安濃群村主郷〈須久利〉（『和名抄』）

この「須久利」は、「村主」の読音を示したものである。su-kuri 須久利〈村主〉は、蕃人に与えられた姓（苗字）である。この他に「村首」（『書記』孝徳 2 年紀）、韓島勝娑婆（『書記』天智 10 年紀）の「勝」も借訓により sukuri と訓む。sukuri〈村主〉は、『三国史記』（巻 45）に見られる水酒村干・一利村干・利伊村干の「村干」と比較でき、sukuri の kuri は、村干の「干」にさかのぼることができる。村干の「干」（*kan）の韻尾-n が外破音化した*kara（＜*kana＜*kan）から変化したものとみられる。

沖永良部島方言・与論島方言・喜界島方言・沖縄北部方言は、たとえば、「ハディ」hadi〈風〉、「ハタ

ナ」hatana〈刀〉のように、k音がh音に変化する傾向にあるが、これは、「カン」が「ハン」に変化する朝鮮語の音声変化と共通する。

筆者は、「カラ」から「キャラ」「ヒャラ」「ヒャアー」「ヒャー」へと変化したと推測する[5]。したがって、以下の音声変化が考えられる。「チャラ」の方は、琉球語で「キ」が「チ」に変化するいわゆるポリヴァーノフの法則により、「キャ」が「チャ」へと変化したものである。

ヒャアー　　ヒャー

*kara ＞*kjara（kʲara）＞*hjara（çara）＞*hjaʔa（çaʔa）＞hjaʔaː（çaʔaː）＞hjaː（çaː）

＞ʧara

チャラ

「干」と「主」が対応していることから、「世の主」の「主」は、sukuri の kuri、すなわち「干」kan に由来するものと考えられる。これらのことから、為政者「按司」にまつわる呼称は、すべて古代朝鮮語で解釈できることが分かった。

吉成・福（2007：59）は、「グラル」という地名・人名を取り上げ、さらに、奄美諸島に分布する「ゴラン」「ゴリヤ」「ガリヤ」「グリヤ」「グラル」などの名称が「ヤマトのいくさ大将」を示唆し、久米島、宮古八重山諸島に「カワラ」「ガワラ」「ガーラ」と〈頭〉あるいは〈頭目〉を意味する名称が分布したこと、沖永良部島に後蘭孫八、石垣島にオヤケアカハチ・ホンガワラがいたこと、肥後方言で「ゴラ」とは〈頭〉を意味し、「かわら」「こうら」が変化したものであること、中国では〈倭寇の頭目〉を指して「日本甲螺」と表記したことなど、いずれも〈倭寇の頭目〉を連想させる言葉が広くみられることから、「地名」としての〈主邑〉、「人名」としての〈頭目〉の意味と解釈している[6]。しかし、この解釈は、先に見た大山氏、稲村氏と同様である。ただし、「ゴーレス」についての解釈は見られない。

筆者は、これらについても、*kara 由来の語と解釈する。李（2000：605）によれば、‘大’を意味する kara／koro も韓国語[7]の tɛ-gari‘大頭’の gari（＜kari）、kol‘頭’と同源語のようである。高嶺や峻嶺などの名に、このような人体の頭部名の名を付け、首長（王）が居住した城邑の名に、このような人体の頭部名で名付けたのは、山嶽や社会の構造を人体に比した擬人化の命名である」と分析している。李（2000：513-518）には、日本地名として、唐津（佐賀県の都市名）、唐島（豊前国 宇佐郡）、韓国語地名[8]として、韓多沙、唐嶽の例を挙げている。「唐」「韓」ともに「カラ」*kara を再構している。

「グラル」「ゴラン」「ゴリヤ」「ガリヤ」「グリヤ」「カワラ」「ガワラ」「ガーラ」「ゴラ」の語根は、*kar-／*kor-にさかのぼることができ、上記の kol‘頭’は*kara＞*koro＞*kor＞kol と派生したものである。これには、以下のような語形変化が推定できる。

*kara ＞ kaːra　カーラ

＞*gara ＞ gaːra　ガーラ

＞ gora　ゴラ（肥後方言）

＞*gari ＞*gari-a ＞ garija＞ gorija＞ gurija

ガリヤ　ゴリヤ　グリヤ

*koro（*kara の異形態）

＞*kor- ＞*gor- ＞*gor-al ＞*gor-al-u ＞*gor-aru ＞ goraɴ　ゴラン

＞ guraru　グラル

＞*goːr-＞ goːr-es　ゴーレス

語頭が「ガ」で始まる「ガーラ」は、2音節2拍の「カラ」karaの1音節・1拍目の「カ」kaの長音化によって2音節3拍の「カーラ」kaːraが生じ、語頭が有声化して「ガーラ」gaːraが生じたと解釈できる。あるいは、「カラ」karaの異形態として、無声音の「カ」kaが有声化した「ガ」gaに変化した2音節2拍の「ガラ」gara から1音節・1拍目の「ガ」gaの長音化によって2音節3拍の「ガーラ」gaːraが生じたとも解釈できる。肥後方言で頭のことを「ゴラ」goraということから、「ガラ」garaからの派生形であるとする解釈の方が優位である。

では、なぜ2音節2拍の「カラ」karaの1音節・1拍目の「カ」kaの長音化によって2音節3拍の「カーラ」kaːraが生じたのかについて、説明がなされなければならない。

首里・那覇方言において、2音節2拍語の1音節・1拍目を長音化させている例として、以下のものが挙げられる

イーチ（息）、カーミ（甕）、クース（古酒）、クワーシ（菓子）、シーシ（煤）、ナーカ（中）、ナーファ（那覇）、ハーイ（針）、ハーシ（箸）、ヒャーク（百）、マーチ（松）、マーミ（豆）、ムーク（婿）、ムートウ（元）などである。

筆者は、2音節2拍語の1音節・1拍目を長音化させて2音節3拍に変化させる傾向にある、上記の首里・那覇方言の影響を受けたものと解釈する。

一方、「ガリヤ」garijaは、「カラ」karaの2音節・2拍目の「ラ」raの「ア」aが「イ」iに変化した派生形「ゴリ」gariに指小辞-aが付加されて「ガリア」gari-aが生じ、さらに派生して「ガリヤ」garijaが生じたと考えられる。

また、語頭が「ゴ」で始まる「ゴラ」「ゴラン」「ゴリヤ」は、それぞれ語根*kar-から変化した語根*kor-の語頭が有声化した語根*gor-の派生形から「ゴラ」gor-a、「ゴラン」gor-aN、「ゴリヤ」gor-ijaが生じたと考えられる。

沖永良部島地名でもある後蘭「グラル」は、後蘭孫八のごとく人名で用いられていたので、「グラル」自体が〈頭目〉の意味を表していた可能性が高い。これは、語根*gor-に古代朝鮮語で「人」を表すalがあり、この語が付加されてgor- alとなり支え母音-uがさらに付加されてgoraluさらにヤマト・琉球に合わせて「ゴラル」goraruへと変化し、さらに1音節・1拍目のgoの母音oが狭母音化して「グラル」guraruが生じたものと見られる。先の「ゴラン」は、「ゴラル」goraruの3音節・3拍目の「ル」ruの代替音としてNが用いられ「ゴラン」goraNが生じたと解釈できる。

一方、「グリヤ」gurijaは「ガリヤ」garijaの1音節・1拍目の「ガ」gaの母音「ア」aが狭母音化して「ゴリヤ」gorijaが生じ、さらに1音節・1拍目の「ゴ」goの母音「オ」oが狭母音化して「グリヤ」gurijaが生じたと考えられる。

「カワラ」「ガワラ」については、長音を「ハ」で表し、文字表記では「カハラ」「ガハラ」と表記することから、ハ行点呼音の類推として「カーラ」を「カワラ」、「ガーラ」を「ガワラ」と発音したことが要因と考えられる。いわば、過剰修正によって生じた可能性が高い。

最後に、「ゴーレス」についてであるが、語根*gor-の異形態*goːr-にポルトガル語との言語接触によって、

ポルトガル語の複数形を表す接辞-esが後接した結果生じた語であると推定する。

以上のように、*kara を出発形として、〈按司〉を表す「チャラ」「ヒャー」、〈倭寇の頭目〉に関連する「グラル」「ゴラン」「ゴリヤ」「ガリヤ」「グリヤ」「カワラ」「ガワラ」「ガーラ」「ゴラ」「ゴーレス」が、すべて派生形として説明することができた。すなわち、琉球における〈首邑〉〈首長〉〈頭目〉を表すこれらの語は、すべて古代朝鮮語にさかのぼると考えられる。

4. おわりに

〈按司〉の別称である「ヒャー」「チャラ」、〈倭寇の頭目〉を表す「ガーラ」、〈それと関連する地名・人名〉の「グラル」「ゴラン」「ゴリヤ」「ガリヤ」「グリヤ」「カワラ」「ガワラ」「ゴラ」「ゴーレス」が、すべて日本語の「かしら」〈頭〉の意ではなく、古代朝鮮語、*kara を出発形とした派生形ということが分かった。複数出自説ではなく単一出自説を提唱することができた。

今後の課題としては、按司とグスクの時代の言語の朝鮮語との接触の要因と同時代の領主的豪族層と倭寇の頭目との関係性について、言語学的に明らかにすることが考えられる。

【注】

(1) 朝鮮語の区分については、河野六郎（1955 ; 1979 : 67）に従った。河野氏は、諺文（ハングル）発明（1943年）以前を古代朝鮮語、15 世紀中葉（1443 年）から 16 世紀末（1952 年壬辰の役まで）を中期朝鮮語、それ以降現代までを近世朝鮮語と定義している。

(2) 伊波（2000 : 149）では、「あんじ」（按司）は「ちやら」と同じ意で、為政者または主君ということ。アルジの転であると述べている。

(3) トメ・ピレス／生田　滋訳注 (1966 : 17-21) 参照。

(4) トメ・ピレス／生田　滋訳注 (1966 : 248) 参照。

(5) 筆者は、橋尾（2013 : 33）において、喜界島の地名「百之台」をヒャン（郷）〈開墾地〉のあるダイ（場所）と解釈したが、ここで、ヒャー（按司）の居るダイ（場所）（古代朝鮮語 dai < tʌi に比定）に訂正する。

(6) 柳田（2009 : 126）には、「何々カワラ（カーラ）といふ人名、八重山にも宮古にも古くはよくきくなり」とあり、注記には「カワラ　地域の頭目のこと」と述べている。

(7) 「韓国語」という表記は、李（2000 : 605）参照。

(8) 「韓国語地名」という表記は、李（2000 : 514-515・518）参照。

【引用・参考文献】

(1) 李　炳銑 (2000)『日本古代地名の研究－日韓古地名の源流と比較－』東洋書院

(2) 稲村賢敷 (1957)『琉球諸島における倭寇史跡の研究』吉川弘文堂

(3) 伊波普猷／外間守善校訂 (2000)『古琉球』岩波文庫

(4) 沖縄古語大辞典編集委員会編 (1995)『沖縄古語大辞典』角川書店

(5) 長　節子 (2002)『中世国境海域の倭と朝鮮』吉川弘文館

(6) 改訂名瀬市誌編纂委員会編 (1996) 『改訂名瀬市史誌 1 巻 歴史編』名瀬市役所
(7) 金久　正 (2011)『復刻　奄美に生きる日本古代文化』南方新社
(8) 金　東昭著／栗田英二訳 (2003)『韓国語変遷史』明石書店
(9) 金 両基 (1999)『日本の文化 韓国の習俗－比較文化論－』明石書店
(10) 来間康男 (2013)『グスクと按司－日本の中世前期と琉球古代－下』日本経済新聞社
(11) 来間康男 (2014)『琉球王国の成立－日本の中世後期と琉球中世前期－上』日本経済新聞社
(12) 河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集』第 1 巻 平凡社
(13) 谷川健一 (2007) 『甦る海上の道・日本と琉球』文春新書
(14) 藤堂明保編 (1978)『学研漢和大辞典』学習研究社
(15)トメ・ピレス／生田　滋訳注 (1966)『当方諸国記』（大航海時代叢書Ⅴ）岩波書店
(16) 中島楽章 (2013)「ゴーレス再考」『史淵』第 150 号 九州大学大学院人文科学研究院
(17) 中本正智 (1978)『琉球語彙史の研究』三一書房
(18) 橋尾直和 (2012) 「琉球語と古代朝鮮語の比較言語学的考察」『高知県立大学紀要（文化学部篇）』第 61 巻
(19) 橋尾直和 (2013)「『園比屋武』『金比屋武』の出自に関する考察」『高知県立大学文化論叢』創刊号
(20) 外間守善 (1986)『沖縄の歴史と文化』中公新書
(21) 洪　玧伸 (2013)「『日韓関係史』の辺境－朝鮮と琉球、『地図上』に描かれる関係史－」『アジア太平洋討究』早稲田大学アジア太平洋研究センター
(22) 真栄平房昭 (1990)「南蛮貿易とその時代」『新琉球史－古琉球編－』琉球新報社
(23) 間宮厚司 (2008) 『沖縄古語の深層－おもろ語の探究』森話社
(24) 村山七郎 (1982)『琉球語の秘密』筑摩書房
(25) 柳田国男／酒井卯作（編） (2009)『南島旅行見聞記』森話社
(26) 吉成直樹（2011）『琉球の成立－移住と交易の歴史－』南方新社
(27) 吉成直樹・福寛美 (2007)『琉球王国誕生』森話社
(28) 李　基文（村山七郎監修・藤本幸夫訳）（1975）『韓国語の歴史』大修館書店

（はしお　なおかず・本学教授）